
カエルのケロ助V e r. 5. 1 1

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カエルのケロ助Ver. 5. 11

【Nコード】

N4255S

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

ここに珍妙な人間がいた。
名を芳崎 奏。
中身カエルの人間である。

ここに珍妙な人間がいた。
ほうぎきかなで
名を芳崎奏。

中身カエルの人間である。

カエルの名はケロ助、非常にカエルとしてはポピュラーな名前である、という事にしておく。

「芳崎先輩、帰らないんですか？」

「ええ、すぐ行きます」

ケロ助は男に声をかけられ、空を見上げるのをやめた。

大きなオレンジの様なおいしそうな夕日。

食べられないので注意されたし。

学生たちが下校する時間である。

ケロ助もまた他の学生同様に学校を後にしようとしていた。

ケロ助が人間の女になってまだ時間も浅いのだが、すっかり馴染んでいた。

何せ元が両生類である。

水陸両用なのだ。

順応性は高い。

ケロ助と男が校門の所まで来ると、男はケロ助に対し、一礼する。

「それじゃあ、芳崎先輩。また明日」

「ええ、そうね。また明日」

背を向けた男が振り返るとケロ助は突っ立ったまま、まだその場に
いる。

不思議そうに男はケロ助に近づくと、声をかけた。

「芳崎先輩、家に帰らないんですか？」

「帰る？ 一体何処に帰ると？」

ケロ助はふと考えた。

帰る場所とは一体どういったものだろうか？

土地に起因するのだろうか？

それとも人。

はたまた物であろうか？

俺にもケロケロ村という故郷がある。

だが、旅に出た俺にとって、そこはもはや帰る場所ではない。

「私に帰る場所なんてない」

「一体どうしたんですか？家で何かあったんですか？」

男を見つめるケロ助の瞳は潤んでいた。

カエルにとって水分は大事なファクターだ。

基本皮膚呼吸なので、その体は湿っていなければいけない。

きつとその名残で目がウルウルしているのだろう。

よく分からんが。

男とケロ助が無言のまま数刻見つめあい、男が口を開く。

「芳崎先輩がもし良ければ、僕の家に来ますか？」

「・・・いいのですか？」

ケロ助はさらに思考する。

俺は流浪の身。

帰る場所はない。

だが、そもそも帰る場所というものは元から存在するものではなく作りだすものではないのか？

で、あるのならば、この旅もこれから帰る場所を作り出すための旅とも言えるのではなかろうか？

「ただ少し問題があって・・・今両親が出払っていて、二人きりになっちゃうんですけど・・・」

「ええ、いいわ」

そんなこんなでカエルの繁殖期っていつだっけと調べる羽目になる

のである。

まあ、何が起ころうとケロ助の旅は続くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4255s/>

カエルのケロ助Ver. 5. 11

2011年10月9日17時44分発行